

2009.06.22

G・E・ムアとブルームズベリー・グループ：第一次大戦期への応答を手がかりに

小田川大典（岡山大学）

daisuke.odagawa@gmail.com

【報告の概要】

①ブルームズベリー・グループの第一次世界大戦への対応の思想的特質を G・E・ムア『倫理学原理』の受容という観点から明らかにするとともに、第一次大戦への応答を手がかりとして、ブルームズベリー・グループ的なムア『倫理学原理』解釈の政治的ポテンシャルを明らかにする。

②着眼点（１）——ケンブリッジ使徒会の派生物としてのブルームズベリー・グループ

③着眼点（２）——ムア『倫理学』の現実への適用としてのブルームズベリー・グループ

1. 問題の所在——リベラルな Detachment ？

0) 「閉じた空間における少人数の人間的交流と美しい対象の享受は、反戦平和の思想を生み出さうか？」——使徒会的問題設定

1) ブルームズベリー・グループ？（小田川 2007）

①「ブルームズベリー・グループ」の形成（「使徒」とスティーヴン家と子女の出会い）
ブルームズベリー・グループの発生は、レズリー・スティーヴンが亡くなり、長女ヴァネッサ、長男トビー、次女ヴァージニア、次男エイドリアンの四人の姉妹兄弟がロンドンのブルームズベリー地区ゴードン・スクエアに引っ越した 1904 年の冬である。トビーはケンブリッジ大トリニティー・カレッジの使徒会メンバーだったリットン・ストレイチー、レナード・ウルフ、クライヴ・ベルと親交があり、毎週土曜日深夜に集まって様々な話題について議論する「深夜会」を結成していた。1905 年の夏以降、トビーがこの「深夜会」を「木曜会」として自宅で開催するようになり、それにヴァネッサ、ヴァージニア、エイドリアンが参加するようになったのがグループの始まりである。

②ケインズは、リットン・ストレイチーから寝取ったホップハウスを寝取られたダンカン・グラント（リットンのいとこ）とつきあい始めた頃で、ブルームズベリー地区に同棲していた縁もあって、グラントと共に木曜会に出席するようになった（但し、ダンカンは 1910 年 2 月末に「エイドリアン・スティーヴンと恋に落ちた」とケインズに告白している）。

③ケインズは、ブルームズベリー・グループの思想的「絆」が「人間的な交流の快楽と美しい対象の享受」という「意識の状態」に最高の価値を置く G・E・ムアの「宗教」だったと回想している。

④ロジャー・フライ、ヴァネッサ・ベルを中心として、フランス美術、特に色彩と形態の普遍的な「形式」の存在を確信するセザンヌら「ポスト印象派」に強い関心を持っていた

（「ポスト・インプレッショニスト」はロジャー・フライの造語）。ロジャー・フライは「ポスト印象派」のデザインを活かしたオメガ工房の経営にも関わっていた。ブルームズベリーのデザインはローラ・アシュレーによって一部商品化されている。

⑤第一次大戦期には、徴兵制が導入され、多くの文学者や知識人が愛国心を唱える中、ほぼ例外なく良心的兵役拒否を申請し、代替労働に従事した（当時大蔵省に勤務していたケインズについても、スキデルスキーがハロッド説——ケインズは良心的兵役拒否を申請していない——が誤りであることを実証している）。ほぼ全員が漂わせていた冷やかな懷疑と厭戦ムードは、愛国心に満ちた「戦争詩人」ルパード・ブルック [使徒 247] や H・G・ウェルズや D・H・ロレンスを激怒させた（ベル 1972:52f）。

⑥橋口やジョンストンが示唆しているように、グループが共有していた厭戦気分と政治嫌悪は、グループの一員だったフォースターの「私の信条」（1939）に要約されているように思われる。《私は絶対的信条を信じない。……私は、「神よ、私は信じません——どうか許したまえ」をモットーとする。……それでも、私は「信条の時代」に生きないわけにはいかない。……私はその世界の中で自分の立場を守らなくてはならないのである。どこから考えることにしようか。まず最初は、個人的な人間関係である。……AがAでなくなり、BもBでなくなる可能性があっても、二人の人間の間には、依然として愛と誠実とがありうるのだ。生きていくためには、「人格」が確実なものであり実在するのだということにして、それに対する反証は一切無視しなければならないのである。……個人的人間関係は、今日では軽蔑されている。ブルジョワ的な贅沢であり、すでに過去になった幸福な時代の遺物だと見られて、そんなものは捨ててしまえ、それよりも何か政治的な運動とか主義に身を捧げろとせつつかれる。私は、この主義というのが嫌いで、国家を裏切るか友を裏切るかと迫られたときには、国家を裏切る勇気を持ちたいと思う。》《実を言うと現代の民主主義は慕わしき恋人などではなく、将来もそうなることはないだろう。だが現代の他の政治形態に比べればそれほど憎むべきものではないという程度には、支持に値するのである。……というわけで、民主主義には二度 [※つまり三分の二だけ] 万歳をしよう。一度目は、多様性を許すからであり、二度目は批判を許すからである。ただし、二度で充分。三度も喝采する必要はない。（『フォースター評論集』岩波文庫、110-114 頁）

⑥第一次大戦期からグループとしての活動が減少し、1920 年に回想のためのメモワール・クラブが結成された。

2) 主な人物の生没年と備考

□スティーヴン家

①James Fitzjames Stephen (1829-1894)[Leslie の兄][使徒 118]

②James Kenneth Stephen (1859-1892)[Fitzjames の次男、精神病院で拒食死、極度の女性嫌悪。Jack the Ripper 疑惑][使徒 197]

③Leslie Stephen (1832-1904)[初妻 Harriet の姉 Anne が同居。Harriet の死後、Julia

と再婚後も。]

④Vanessa Bell (nee Stephen, 1879-1961)[Julia の娘 Clive と結婚。R.Fry→D.Grant]

⑤Thoby Stephen (1880-1906)[26 歳のとき、腸チフスで死亡。]

⑥Adeline Virginia Woolf (nee Stephen, 1882-1941)

⑦Adrian Stephen (1883-1948)[第一次大戦中は過激な平和主義運動に参加]

□ブルームズベリー・グループの主なメンバー

①Roger Eliot Fry (1866-1934)[オメガ工房の経営等に専念][使徒 214]

②Desmond MacCarthy (1877-1952)[国際赤十字の一員としてフランス戦線の陸軍野戦病院に][使徒 231]

③Edward Morgan Forster (1879-1970)[国際赤十字の組織に入り、戦争での行方不明者探索のため、エジプトのアレクサンドリアへ][使徒 237]

④Leonard Sidney Woolf (1880-1969)[Virginia と結婚。健康上の理由で兵役免除。国際機構の役割についての研究を発表し『世界政府』を 1916 年に発表。1918 年にイギリス外務省が国際連盟設立についての意見書を作成する際に貢献。][使徒 241]

⑤Giles Lytton Strachey (1880-1932)[健康上の理由で兵役を免除。皮肉に満ちた『ヴィクトリア朝名士伝』でナショナリズムに冷や水を浴びせる。][使徒 239]

⑥Arthur Clive Heward Bell (1881-1964)[田舎紳士。何度の求婚の末、Vanessa と結婚。大戦が始まると即座に『いますぐ和平を』(1915)を刊行、ロンドン市長から発禁処分をくらう。良心的兵役拒否を申請し、農場で代替労働に従事。]

⑦John Maynard Keynes (1883-1946)[L.Strachey→D.Grant 大蔵省辞職を覚悟で良心的兵役拒否を申請 ダンカン・グラントとディヴィッド・ガーネットの良心的兵役拒否申請の認可のために尽力][使徒 243]

⑧Duncan James Corrowr Grant (1885-1978)[D.Garnett→Vanessa ケインズの尽力で良心的兵役拒否認可。農場で代替労働]

⑨David Garnett (1892-1981)[ケインズの尽力で良心的兵役拒否認可。農場で代替労働]

3) 幾つかの疑問

①「父レズリーのヴィクトリア朝的モラリズムからの解放」という説明の不十分さ
ステイーヴン家も関わっていた「ケンブリッジ使徒会」との関係や如何?

②ムア[使徒 229]『倫理学原理』の影響とは?

4) 本報告で試みること——ブルームズベリーの思想を有意なかたちで再構成する試み

①ケンブリッジ使徒会の「伝統」との関連でブルームズベリーの歴史的位置を探ること

②第一次大戦への応答との関連でムア『倫理学原理』のインパクトの内実を探ること

2. 使徒会の歴史とブルームズベリー・グループ

(Levy 1981、ディーコン 1988、スキデルスキー1987 を参照)

1) 使徒会 (Cambridge Apostles or Cambridge Conversazione Society)

①1820年にケンブリッジ大セントジョンズ・カレッジで結成された秘密クラブ。メンバーはセントジョンズ、キングズ、トリニティの三つのカレッジから数ヶ月に渡る慎重な審査を経て選ばれた。

②毎週土曜日の夜の定時に事務局長の部屋に集まり、「モデレーター」（司会）が予め与えられた問題について論文を読み、他のメンバーがくじで決められた順番で、必ず「率直」に発言し、最後に全員で評決をとり、次の週の問題を決めてから解散するという手順で会合が行なわれた。コーヒー、紅茶と「鯨」（サーディンのこと）をのせたトーストが出る。

③原則として病気等の理由がないかぎり欠席は認められなかったが、五年目ぐらいで引退し、「天使」として「翼を持つ」——つまり終身会員として会の集まりに好きなときに参加する資格を持つ——ことが認められる。

④使徒になりうる候補者は「胎児」（embryos）と呼ばれ、極秘の審査と全員一致での選考を経た後によりやく使徒の資格を得る（「誕生」）。「父」と呼ばれる後見人がつく。

⑤会の記録や過去に読み上げられた論文はすべて「聖櫃」（Ark）という杉材のトランクに保存された。但し、紛失しているものも少なくない（「使徒会」研究の最大の難関）。

2) 使徒会の歴史

①福音書の教えの説き方について討論するために12人の聖職者志望者で集まったので「使徒」会という名称が付けられた。『ルバイヤート』の翻訳者エドワード・フィッツジェラルド(Edward Marlborough FitzGerald, 1809-1883)の回想によれば「使徒会という通称は、大学院生のメンバーで学業のできない者が12人いて、使徒と呼ばれたことに由来している」と述べている（ディーコン 1988:17）。

②道徳哲学の観点から個人あるいは社会のレベルで「精神の再生」を論じる伝統を確固たるものにしたのは、後にキリスト教社会主義者にして、ケンブリッジに倫理哲学教授となるモーリス（John Frederick Denison Maurice, 1805-1872, 使徒 30）であった。また、政治や社会についての使徒会での議論に影響を及ぼした思想家としては、サンシモンとコールリッジが挙げられる。サンシモン主義の影響（特にだらしない女性関係）に対しては使徒会内部でも反発があったが、実際にイギリスにおけるサンシモン主義の運動に参加する使徒も現れた（ジョージ・ランガム、使徒 57）。社会主義にも好意的であり、フェビアン主義に近づく使徒もいたほか、現代でも、たとえばエリック・ホブズボームは使徒であることがディーコンによって確認されている（なお、ディーコンのリストによれば、思想史家として名高いスティーヴン・トゥールミンやクエンティン・スキナーも使徒である）。

③文芸、特に詩に対する関心も19世紀半ばには見られるようになり（1830年代に「シェリーの詩には不道徳の傾向があるか」という設問が論じられている）1829年に入会したものの論文が書けないという理由で30年に退会したテニスン(Alfred Tennyson, 1809-1892, 使徒 70, 1850年に桂冠詩人)は、詩人として大成した後、1855年に再入会を認められ、同

年に「天使」となっている。

④テニソンの詩には当時の使徒会の様子が描かれており、使徒たちは「ロートスを食べる人たち」——ロートスの実を食べて望郷の気持ちを忘れその地にとどまりたくなってしまうひとたち（『オデュッセイア』）——に例えられている。極度に洗練された、議論のための議論にふける傾向が見られ、阿片に手を出したり、精神状態が不安定になる使徒も現れ、トマス・サンダーランド（使徒 53）は「発狂して死んだ」とも伝えられている。

⑤同性愛の傾向は 1830 年代から見られたが、大半はプラトニックなもので、実行とスキャンダルを伴ったのは、教え子に手を出して脅迫され、学校関係の職をすべて辞したウィリアム・ジョンソン（使徒 112、以後、ウィリアム・コリーに改名）の時代と、19 世紀末から 20 世紀の初めだけであった。後者において最もあからさまに「高級なソドミー」を実践したのはリットン・ストレイチー（239）とケインズ（243）で、ラッセル（224）によればこの二人が会の主導権を握って以来、会員選抜の基準は「知的ないし精神的な資質」から「容姿の端麗さ」に移行し、同性愛はごくあたりまえのこととなった。

⑥同性愛的な連帯が強まる一方で、女性嫌悪（ミソジニー）の傾向も確実に見られ、その極端な例が詩の中で「こんな女は殺されて切り刻まれてもかまわない」とうたった J・K・スティーヴン（使徒 197、J・F・スティーヴン@118 の次男=L・スティーヴンの甥=ヴァネッサやヴァージニアのいとこ）であった。彼は 1892 年に精神病院で拒食の末に亡くなっているが、「切り裂きジャック」の疑惑がかけられている一人でもある。

⑦会での「親密な友人のグループによる全き熱意と率直さに基づく真理の追求」（シジウィック）と日常生活とのあまりの違いからか、19 世紀から（おそらくカント哲学の影響で）会に関わるものを「実在」(Reality) と呼び、それに対し会の外部を「現象的」(Phenomenal) と呼ぶ習慣が生まれた。たとえば、マクタガートは結婚することを「現象的な妻を娶る」と呼んでいたが、濃密な思弁と交友の「リアル」と世俗の「現象的」日常の関係をどう考えるかは使徒会にとって最も深刻な問題であった（シジウィック『倫理学の方法』の有名な「実践理性の二元性」——「合理的利己主義」と「功利主義」という二つの相互に独立した統合的な倫理学が理論的に成り立ちうるということ——もおそらくこの問題の延長線上にあると考えられる）。

3. 小括——ブルームズベリーの独自性

①伝統による制約の欠如——活動の自由、寿命の短さ

使徒会は、ケンブリッジ大の特定のカレッジの構成員限定 運営方法も一定

②伝統以外の再帰的な「絆」——ムアの宗教、非戦（反戦）、視覚芸術への関心

使徒会はムアに対しても戦争に対しても見解は様々 視覚芸術への無関心

③以下、とりあえずムアと非戦（反戦）との関連を中心に BB の思想を検討

4. ムア倫理学と第一次大戦への応答——ケインズの青年時代を手がかりに

1) detachment?——ケインズやストレイチーのムア理解についてのラッセルの回想

《ケンブリッジにおいてケインズとリットン・ストレイチーは共に私の世代よりも約十歳下の世代に属しているが、この十年間に精神の風土は驚異的に変わった。われわれの世代が依然としてヴィクトリア朝の人間だったのに対し、彼らはエドワード朝の人間である。われわれの世代は、政治や自由な討論による秩序ある進歩を信じていた。自信があれば、大衆の指導者になることを望んだかもしれない。しかし、その中の誰ひとりとして、大衆から孤立することを望むものはいなかった。ケインズとリットンの世代はペリシテ人〔俗物〕との親密な関わりを少しも望んでいない。むしろ彼らは、心地よい日陰でくつろぎながら隠遁生活を送ることを望み、善 (the good) とは徒党を組んだエリートがお互いを情熱的に誉めあうことだと考えていた。この教説を、彼らはまったく不当にもG・E・ムアが考え出したものだと考え、自分たちがムアの弟子であると公言した。ケインズは回想録「若き日の信条」で当時の彼らがムアを賛美していたことにふれ、さらには、ムアの理論の大部分を無視しがちであったとも述べている。ムアは道徳にしかるべき力点をおいていたし、有機的統一の理論を用いることで、善を社会から遊離した一連の情熱的な瞬間によって構成されると考える見方を退けていた。しかし、ムアの弟子を自称していた者たちは、彼の教えのこの側面を見落とし、彼の倫理学を、もったいぶった女学校の感傷主義に貶めてしまったのである。》(Rosenbaum 1975: 403)

2) ケインズの回想

《私がケンブリッジ大学に入学したのは1902年のミカエルマス学期〔10月1日～〕であり、この第一学年の終わりには、ムアの『倫理学原理』が出版されている。……われわれにとって、この書物の与えた影響と、出版の前後に行なわれた議論とは決定的に重要なものであった。……当時形成されたものの感じ方……こそ、われわれの大部分に影響し、このクラブ〔ブルームズベリー・グループ〕に集団性を与え、われわれを外部から隔絶させてきた当のものであった。……われわれがムアから手に入れたものは、彼がわれわれの前に差し出したものの全体ではなかった。彼は片足を新天地の敷居の上に乗せてはいたが、もう一方の足はシジウィックやベンサム流の計算、すなわち正しい行動に関する一般法則のなかに突っ込んでいた。『倫理学原理』のなかには、われわれの関心をいささかも惹かない一章〔第五章〕があった。われわれは、いわば、ムアの宗教〔第六章の「内在的価値」論〕を受け容れたが、彼の道徳〔第五章の実践的道徳〕を捨てたのである。それどころか、実際われわれの意見では、彼の宗教の最大利点のひとつは、宗教が道徳を必要としないところにあった。……神はわれわれの閉鎖的な世界の内部に住んでいた。「善くあること」〔意識の状態〕と「善を行なうこと」〔実践倫理〕との間には、あまり密接な関係はなかった。われわれの感じでは、実際は後者が前者を妨害する危険すらあった。しかし、本来の宗教というものは、近代の「社会的奉仕」を唱える擬似宗教とは全く違い、つねに高潔なもの

であった。たぶん、われわれの宗教が全く反世俗的であって、富や権力、名声や成功のどのひとつに対しても関心を示さず、全く軽蔑していたということがそれを完全に示している。》(「若き日の信条」、中公世界の名著版、112-115 頁——ムア倫理学における〈善についての思弁〉と〈善いことについての因果論的研究〉の乖離についての指摘！)

3) G. E. Moore, *Principia Ethica* (1903) [<http://fair-use.org/g-e-moore/principia-ethica/>]

○序文 Preface

□本書の目的——倫理学が答えるべき二つの問いの峻別

①どのような種類のものがそれ自体のために存在すべきなのか？(内在的な“being good”)

→〈直観的＝証明も反証もできない〉自明な種類の倫理的真理

②われわれはどのような種類の行為を行なうべきなのか？(手段的な“doing good”)

→科学的研究によって証明と反証が可能な、行為の結果についての様々な因果的真理

○第一章 倫理学の主題

A 科学的な倫理学は、ある主語についての「善さ goodness」(あるいは悪さ badness)をめぐり倫理的判断を研究の対象とする。

B しかし、他方、倫理学は倫理的判断の述語である「善さ goodness」「善 good」とは何かという問題も研究の対象としている。だが、結論からいえば、この「善 good」とな何かを定義することは不可能である。というのも、定義とは複数の要素で構成された思考対象の分析のことを意味しているが、「善」はその単純さゆえに分析不可能であるから、定義することも不可能だということになる。(これに対し、既にこの述語を付されている「善いもの the good」は〈定義＝分析〉可能である。)このように「善」は定義不可能であるにも関わらず、しばしば「善」を他の何かによって定義しようという試みが行なわれてきた。このように他の何かを持ち出すことによって「善」を定義しようとする誤りを、「自然主義的誤謬」(the naturalistic fallacy)と呼ぶ。

C 何か倫理的に「善い」と判断されるのは次の二つの場合である。ひとつはその何か①〈それ自体で善い〉場合であり、もうひとつはその何か②〈他の〔それ自体で善い〕何かの目的のための手段として因果論的に善い〉場合である。後者は「手段として善い」に過ぎないが、前者は「それ自体のために善い」「それ自体において善い」という意味で「内在的価値 intrinsic value」を持つ。①内在的価値は「他の命題から推論」することも「証明」も不可能だという点において「直観的」なものである。これに対し、②手段的価値は因果論的に検証・反証が可能である。換言すれば、②は最善の結果を伴う行為の因果論的選択という科学的な研究が可能な領域である。

D 倫理学の対象となるものは、複数の「善いもの」が絡み合った「有機的 organic」全体であり、そこには内在的価値と手段的価値の因果的連鎖が絡み合っている。

○第二章 自然主義的倫理学(自然主義的誤謬その一)

「快」以外の「自然的」「正常」な何かに依拠して「善」を定義する進化論倫理学

○第三章 快樂主義（自然主義的誤謬その二）

「自然的」な「快」を根拠として「善」を定義する快樂主義的功利主義

○第四章 形而上学的倫理学

「超感覺的存在」の定義に依拠して「善」を定義するカント倫理学

○第五章 行為との関連における倫理学（手段的価値の因果論的研究＝実践的倫理学）

「どのような行為をなすべきか」という問いは「善い結果をもたらすための手段として可能なかぎり善い行為は何か」という問いと等価であり、手段についての因果論的な問いを伴うものである。手段的価値についての幾つかの結論。①行為の義務は「自明」なものではない（∵帰結についての因果論的考察によって導かれる）ので、直観主義は誤りである。②あらゆる場合において選ぶべきすべての行為の中でどの行為が全体の結果を最善にするかということを証明することは明らかに不可能である。したがって、厳密な意味でのわれわれの「義務」を見出すことはできない。しかしながら、われわれが選ぶような行為の中で、どれが最善の結果をもたらすかということを示すことは可能かもしれない。倫理学がなしてきたこと、なしうることは、絶対的な義務を決定することではなく、ある状況の下で選ぶべき幾つかの選択肢の中で、どれが最も善い結果をもたらすかを示すことだけである。

○第六章 理想（内在的価値の研究——「善とは何か」を問うメタ倫理学）

複数の「善いもの」が絡み合った「有機的 organic」全体の中から、手段的価値の因果的連鎖という通俗的な倫理を取り除き、純粋な内在的価値を抽出する「絶対的孤立化」の方法。日常的な「現象的」世界の解体と、使徒会という「実在的」世界の顕現？

《さて、この絶対的孤立化（absolute isolation）という方法を用いて、こうした誤りを回避するならば、解答すべき問題は、倫理学についての論争から予期されるよりも、はるかに容易であるように思われる。……われわれの知識と想像の及ぶかぎりにおいて、類なき最高の価値を持っているものは、ある意識の状態（certain states of consciousness）であり、大まかな言い方をすれば、それは人間的な交流の快樂と美しい対象の享受（the pleasures of human intercourse and the enjoyment of beautiful objects）にほかならない。この問いを自らに向けたことのあるひとならば、おそらくだれひとりとして、人格的な情（affection）と、芸術や自然における美しいものの鑑賞とが、それ自体で善いということに疑いを挟むことはないだろう。また、何が純粋にそれ自体のための価値を持つかということに厳密に考えた場合に、なにか別のものがこの二つに含まれるものと同等に偉大な価値を持つなどということを考えるひとがいるとも思えない。……実際、この単純な真理は世界中で認められていると言ってよい。これまで認められてこなかったのは、それが道徳哲学の究極的かつ根本的な真理だということである。すなわち、公的あるいは私的な義務を行なうことが正しいとされるのは、専らそれがこれら二つのために——将来、できるだけ多くの人格的な情と美の享受が存在することを目的として——行なわれる場合にかぎられるということ。この二つこそが徳の存在理由であるということ。これら二つの複合体の、

構成要素や特徴ではなく、まさに全体こそが、人間の行為の合理的な究極目標と、社会の進歩の唯一の規準を形成しているということ。これらの真理は、見過ごされがちであったように思われる。」(Chapter 6, § 113)

2) 操作的なまとめ

①倫理学は、分析的な定義を拒む「善」の「内在的価値」についての「直観」を扱う思弁的な倫理学と、定義可能な「善いもの」の手段的価値を因果論的に研究する倫理学の二つに区別される。

②「絶対的孤立化」に基づく直観によれば、経験的な日常世界の因果論的連鎖に汚されることのない、純粹にして最高の「内在的価値」は、人間的交流と美しい対象の享受である。

5. ムアと第一次大戦への応答

1) ケインズの良心的兵役拒否申請と『講和の経済的帰結』

①ハロッド 1967(1951)説に対するスキデルスキー1992(1983)の批判

- ・ハロッド：良心的兵役拒否申請の事実を否認 若き日の思想形成と哲学を軽視
- ・スキデルスキー：『講和の経済的帰結』に至る 1910 年代の思想形成を重視

②スキデルスキー説：思弁と実践のムアの切断を批判的に継承したケインズ

《ポール・レビーは彼の書いたムアの伝記『ムアとケンブリッジ使徒会』の中で〔後年のケインズのムア批判——「現実世界からの逃避を正当化する浅薄な議論だ」——に対してムア倫理学の社会的側面を強調するラッセルやレナード・ウルフよりも〕もっと過激な論議を展開した。使徒たちが『倫理学原理』から「彼らの興味を引く部分だけ——それは決してその本が提供するすべてではなかった」を受け容れたという事実は、彼の見解によれば「ムアが彼らに及ぼした影響が、もったいぶった学説的なものでは全くなく、人格的なものであった」ことを示している。……ムア主義は哲学における「人格崇拜」の例だった。ケインズの〔「若き日の信条」〕は『倫理学原理』の哲学的内容の核心とはほとんどかわりを持っていない。……レビーは、ケインズがムアの主張の論理面での意義に注目しなかったと述べ、明白な誤りを犯している。ケインズ自身が保有していた『倫理学原理』は、鉛筆による書き込みで一杯であり、それらは主として「善の定義不可能性」をめぐる難解な疑問に関するものだった。レビーはまた、マーシャル・ライブラリーに残された、この問題や、利己主義の問題や、『倫理学原理』が提起したその他の哲学的問題を扱ったケインズの論文と手稿を見ていない。ラッセル、ウルフ、そしてブレイスウェイトは、ムアの倫理学すなわち「宗教」が、社会にかかわる行為を必然的に伴うことを力説しようとしたのであり、その拡大解釈によりケインズが後年経済改革に専心した根拠を提示した。しかし、この考えは、ムアが倫理上の善と政治的ないし経済的福祉との間に論理的つながりを与えていなかったという決定的な核心を無視してしまっている。たとえば経済的福祉は明らかに倫理上の善と同じではない。そして、ムアの主張には、経済的福祉が倫理上の善の必要条件であることを示すような内容は全くない。この二つを関連させることは、ムアの体系

の外からの追加的主張によって支えられねばならない。ラッセルとウルフは、戦争を防いだり、植民地主義をやめさせたりするという課題に熱心に打ち込むことができたというかぎりにおいて、疑いもなく、賢明にも古い道德観に頼っていた。しかし、このこと〔実践道德においてあくまでも常識的な道德に従ったこと〕が彼らをムア信奉者にし、並外れた人物にしたのである。……ケインズは常に〔あらゆる制約を受けることなく「内在的価値」を追求したという意味で〕「ムア的」であり続けた。……彼自身は決して〔「内在的価値」追求の一方で常識的な実践倫理に従う〕ムア主義者でなかったにも関わらず。》(スキデルスキー: 236-239)

- ③青年ケインズにおけるムア実践倫理（より確実な判断を下すべく常識を重視）の受容
- ・「エドモンド・バークの政治学説」（1904）：「善」と区別される「幸福」の最大化という観点への共鳴。その状況下で下しうる最も間違いの少ない判断としての伝統や常識
 - ・「倫理学雑考」（190507_09）：思弁倫理学とは別に、「行為の根拠」となる[確からしさ probability] を問う実践倫理学を提唱
 - ・『確率論』（1906-14→1921）：命題間の蓋然的關係の解明
→当該状況下で導き出しうる、行為が蓋然的に伴う結果についての確実な知識
 - ・『講和の経済的帰結』（1919）：ドイツの支払い能力を考慮しないで賠償金額（1320 億マルク 当時のドイツの GNP20 年分）を定めたパリ講和条約に対する、経済学的観点からの批判

6. むすびにかえて——ブルームズベリー・グループにおけるローティ的問題

1) ローティ的問題：リチャード・ローティが青年時代に苦悩した「野生の蘭」（宇宙的な美への関心）と「トロツキー」（社会的正義の実現）の論理的関係。ローティ自身は両者の関連を否定的に捉え、「私」領域における世界の豊穡さを語るためのヴォキャビュラリーの探求（ポストモダニズム）と、「公」領域における政治的・経済的な正義の追求を切り離す「ポストモダン・ブルジョア・リベラリズム」を唱える。

2) ケインズが見出したムア倫理学における「宗教」と「道德」の不連続

ブルームズベリーの平和論の核心は、フォースターの個人的な倫理か、ケインズの経済政策か……

【文献一覧】

Bell, Quentin 1968. *Bloomsbury*, Weidenfeld & Nicolson. (出淵敬子訳『ブルームズベリー・グループ——二十世紀イギリス文化の知的良心』みすず書房, 1972) .

Rosenbaum, S.P., ed. 1983. *Bloomsbury Group Reader*, Blackwell.

Johnstone, 1963. *The Bloomsbury Group*, 1963.

Lang, Berel 1964. Intuition in Bloomsbury, *Journal of the History of Ideas*, 25.

Levy, Paul 1981. *G. E. Moore and the Cambridge Apostles*.

Regan, Tom 1986. *Bloomsbury's Prophet: G.E. Moore and the Development of His Moral Philosophy*, Temple University Press.

Rosenbaum, ed., *The Bloomsbury Group*, Croom Helm,

小田川大典 2007 「ブルームズベリー・グループ」「唯美主義」日本イギリス哲学会編『イギリス哲学・思想事典』研究社

スキデルスキー『ジョン・メイナード・ケインズ 裏切られた期待 1883-1920』(I・II)
東洋経済新報社

ディーコン『ケンブリッジのエリートたち』晶文社

橋口稔 1989『ブルームズベリー・グループ』中央公論社

平井俊頭 2007『ケインズとケンブリッジ的世界』ミネルヴァ書房

ローティ『リベラル・ユートピアという希望』岩波書店